

総合討論

コーディネーター：滋賀県琵琶湖環境科学研究センター

金子 有子

金子：まず、本日のご発表へのご質問等がございましたら、お受けしたいと思います。ただ、それだけではなくて、もちろん、どうしていけばよいかというようなことを、それぞれのご立場から議論を深めるということで、参加者の皆様とともに、議論の方ももしございましたら、展開していきたいと思います。なお、本日の研究会に昨年度と同様、里湖としての内湖再生を考えるという記録集も作成して、関係機関に配布の予定です。

それでは、ご会場の方から、ご講演に対するご質問ございましたら。ご意見、ご提案等でも構いません

参加者：琵琶湖淀川水質保全機構の土屋と申します。非常に素晴らしいご講演ばかり聞かせていただきまして、ありがとうございます。まず、生態系の遷移という観点からの話をちょっと僕からお伝えしたいんですが、里山というのはやはり森林が遷移して行って、それを止める。人為的な企みで止めることによって、多様性を保全するという考え方だと思うんです。例えば、最初のご講演の中では海岸の話がでてきました。そこというのは、生態系の遷移という観点ではどちらかという遷移というよりは、攪乱の強いところのかなという考え方もできるかと思えますし、一方で、湖を考えてみると、例えば、湖岸物というのは、遷移と攪乱の観点でいったら、どういう遷移があって、それを人為的に止める必要があるのか。内湖の観点でいうと、佐野先生のお話もありましたけれども、内湖というのは、どんどん増え増えして行って、泥が溜まって行って沈殿化するという遷移があるのか、で、それを止めていいんだとか。内湖の植生については、どういう遷移をしていくから、それを止めるためにヨシを刈るんだとか、そういうような観点があるかと思うんですが、その点についてどのような整理ができるのか、っていう質問をさせていただきたいと思えます。

向井：生態系の遷移という意味でいえば、海岸については、生物が自然を改造、改変して生態系そのものが変わっていくという過程よりも、むしろやはり、自然の、例えば、物理的な力によって物事が変わっていく面が非常に大きい

んです。ただ、ちらっと言いましたけれども、後背地の植生なんか砂浜を育てるといようなことはありますけれども、基本的には、やはり、大きな波とか、それから水の動きとか、砂の動きとか、そういうもので非常に大きなところは決まっていていって、生態系の変化という意味での遷移っていうのは、なかなか生物から働きかけるっていう形ではやられていない。それはそういう遷移をどうするかっていうのは、これから考えていかないといけないと思います。ただ、里湖という形で、先ほど言われた里山とか里地とかと同じような意味での里湖という言葉で言えるような遷移を止めるというようなやり方というのは、海岸ではちょっと考えられないだろうというふうに思っています。

参加者：私は植物の研究者ですが、植物から見ると、内湖を里山とすれば、奥山に相当するのは内湖の周りに広大に広がっていた氾濫原だったろうと思います。明治初期には、琵琶湖の周りには今の50倍の面積の氾濫原があったそうです。奥山である本来の自然の中では、薪炭林に利用されるコナラもヨシも自然に世代交代をして、種を存続させることができますので、これらの植物種やその群落が人手を加えなければ保たれないという認識は違うと思います。そういう奥山的な広い氾濫原があって、それとは別に、その中で里山的な空間として利用されていた内湖には、人為的に管理した環境下で人間に都合よく使うためのヨシ群落やコナラ林の形態があったということだと思います。ヨシは本来は自然に起きる氾濫で群落が破壊されることによって世代交代しますが、現在は流域レベルの治水で氾濫環境が失われているため、群落が過密になりヘドロが溜まるようなことも起きています。しかし、それは本来の自然環境下での姿ではないということは心に留めておいてほしいと思います。また、少し昔には50倍あった氾濫原が失われてしまった今、人間の生活に利用されていたからこそ残された内湖には、人間の関与が必要な人為的・二次的自然としての価値だけでなく、奥山的な本来の自然や生物多様性を復元する唯一残された場としての価値や意義も背負

わされているのではないかと思います。

参加者：酒井ですが。まず、内湖の保全、今、伊庭さんもおっしゃったんですけど、その穴が開いた、で、現状変化して何とか残そうという努力っていうのは、やっぱりね、周りの人間いろいろ対策を練ったりいろいろ考えて、文献なり、お話が出ているんですけど。やっぱり、まだまだ住民が本当にかっちりスクラム組んだ形で行政に働きかけたり、国に働きかけて、金を取ってくるというような、予算を付けたかというようなことが、まだパワーとしてできあがっていない。

それともう一点だけですね、土砂移動っていうのか、流域、それから支川からの土砂移動。それから琵琶湖の中のヘドロとか土砂の分析とか、そんなことがヨシ帯も含めてなんですけれど、例えば淀川水系で鶴殿というところがあって、ヨシの植栽をするわけですけど、全然違う土を持って来たら育たないとか。もちろん、水の操作の問題もありますけれど。いったいその内湖の岩、あちこちの内湖の土砂の状態が、岩場があったり、今その辺のところになまづが来たりっていうようなこともあるわけです。どういう形で、そういう山奥から、水源地から水が流れてきて、その土砂移動がどっかで止まっているとか。そういうものが琵琶湖に影響しているという分析っちゅうのが少ないんじゃないかというような気がします。風とか、循環域とか、今までもいろいろお聞きしとるわけですけど、その辺とのアプローチっていうのか、分析っていうのはやっぱりしていただいて、それを住民の方にこういう形で、それこそ氾濫源があった、根の掘り方がこうやった、現れた土砂がこうなって、こういう形成で内湖なりができたというようなところの話しかけっちゅうのは、やっぱりもつともつと必要じゃないか。……ようなことで、講師の方も含めて、私も勉強もつともつとしたいわけですよ。琵琶湖淀川水系って言って。いろいろなところをもつとえぐりだしてもらって、この勉強会を継続してやっていただいたら。まあ、そう思います。以上です。

西野：今、酒井さんからいろいろご指摘を受けたんですけど。やはり科学的根拠を元に議論しないといけないわけです。意見の違いがあるという自体は、大変重要なことですが、それが正しいか間違っているかについては、あくまで、科学的根拠をもとに、議論すべきだと思います。

先ほどのご質問につきましては、もともと内湖という

のは、半永久的な存在ではありません。内湖にはいろんな成因があるんですが、ひとつは、湖に流れ込んでいる川があって、湖側に山があると、埋め残し内湖というんですけど、川から運ばれた土砂が回り込んで、琵琶湖とちょっと離れたところに小さな水域ができたものを内湖と呼んでいます。先ほど、早崎内湖はもうなくなりました、という話をしましたけども、そこを完全に干拓して、湖側の砂州の上に湖岸道路を造ってしまったんですね。そうすると、どうなったかというと、早崎内湖のちょうど北側に、今奥島といわれてる小さな島ができました。琵琶湖の水位が大きく低下すると、湖岸から島までずっと歩いて行けるようになっていきます。なぜそんなことが起こるかと言うと、実は、早崎内湖の砂州は姉川から運ばれた土砂でできたんですが、それが早崎内湖が干拓されて、砂州を閉じて道路にしちゃったもんだから、姉川から運ばれてくる土砂の行き場がなくなって、さらに北の方に土砂が移動しているわけです。恐らく、あと100年くらいすると、尾上内湖というような内湖がまたできる。と思います。このように、内湖というのは、100年から数百年のレベルで土砂移動によって、陸になったり、更に湖側にできてきたりっていうようなことを繰り返して、できてきた存在です。内湖の位置や形状は、それぞれの地域の地形や、地質、土砂を運んでくる川がどこにあるかということによって決まってくるので、一般的にどうかということはなかなか言えない。

で、私、きょういろいろお話を伺って非常に強く感じたのは、我々生物学者と歴史学者さんの意識の違いや、もちろん住民の方々の意識との違いというのもやっぱりあるわけです。何も内湖が今、全部わかっているわけでもないんで、我々から見たらこうです。歴史学者から見たらこうです。だけど、実際ここで住んでおられる方から見たら内湖とはどんなもので、どのような関わりがあったのかというのは、それぞれの地元の方の内湖との関わり方の掘り起こしをやっていかないと分からないのです。しかし、佐野先生がおっしゃったように、昔を知っているお年寄りがどんどん亡くなっていて、そこでどんな生業が行われていたのか。内湖がどんな形状で、どんな生き物がいたのかというのが、どんどんわからなくなって来ているんですね。だからやっぱりそういう記憶をそれぞれの地域で明らかにしていく、ということをおそらくやらないと、人と内湖の関わりの方の具体的な様相についても、どんどん記憶が失

われていくんではないかと思います。だから、内湖の保全の問題っていうのは、専門家だけじゃなくて、内湖の地域にすむ人々がどう関わっていくか、また過去の記憶の掘り起こしをどういうふうにやっていくかというのが、今後、非常に重要になってくると思います。

今日もお話ししましたように、それぞれの内湖に、それぞれ地域の特性があるんですね。例えば、今津の浜分沼は非常に水温が低いです。そういう内湖には、低い水温を好むスナヤツメがいます。そんな魚は、南や東の内湖には一切出てきません。浜分沼には、多分湧き水があって、湧き水がでてくる内湖と、そうじゃない内湖がある。そんなふうに内湖とていうのは、もともと一括りでは語れないんですね。琵琶湖の周りにある小水域でそれぞれに、歴史的な経緯があるし、地形的にも地形な条件も違う。運動条件、気象条件、全く違うんですね。北の内湖と南の内湖と。そういう違いというか、地域の特性を、それぞれ生かした形でどう再生していくか、というのが今後の課題だと思います。

す。ですから、我々生物学者や歴史学者も協力しますし、もちろん行政も協力するので、ぜひ、琵琶湖の周りの内湖をどう保全していったらいいか。どうやっていったらいいか、というのを、やっぱりみんなで考えていく必要があると思います。

今日は、その一つの機会として、内湖についてこういうもの見方があります、また、実際に活動をやっておられる方はこんなふうに考えておられます。あるいは、こんな活動をやっておられます、っていうようなお話だったと思います。

今後も内湖だけではなくて、琵琶湖の湖岸についてもできるかぎり、センターも予算がかなりなくなったので、本当に今後どのくらい研究会が開けるかわからないんですけど、できるかぎり、お金のあまりかからないような形で、また研究会を開いていきたいと思っています。皆様には、今後とも、またぜひ参加していただけたらと思います。今日はどうもありがとうございました。